

〔農業全書<sup>二</sup>五穀〕豌豆

ゑんどうは、二三月種るとあれども、是も八月まきて、寒中をへて花咲、春に至てはやくもろくの豆にさきだちて、實のるを賞翫とするなり、又おほくうへをき、春になり其苗をとり、田の糞に用ひて、すぐれてよくきくものなり、ことに苗代のころとして、無類のものなり。

〔農政全書<sup>二</sup>十六樹藝〕豌豆遠志作同、鵲園豆、唐史作華豆、崔寔作禪豆、即青斑豆也、田野間禾中、往往有之、俗名小寒者是也。

務本新書曰、豌豆、二三月種、諸豆之中、豌豆最爲耐陳、又收多、熟早、如近城郭、摘豆角賣、先可變物、舊時莊農往往獻送此豆、以爲嘗新、蓋一歲之中、貴其先也、又熟時少有人馬傷踐、以此按之、甚宜多種、玄扈先生曰、豌豆與蠶豆各種、蠶豆之利倍于豌豆、一其耐陳則一也。

〔大鏡<sup>七</sup>太政大臣道長〕かばかり安穩泰平なる時にはあひなんやとおもふは、おきならがいやしきやどりも、おびひもときて、かどをだにさ、でやすらかにのいふしたれば、としもわか、いのちものびたるぞかし、まづはきたのかたかも、かはらにつくりたる野のまめ、さ、げ、うり、なすびといふもの、このなかごろは、さらに術なかりし物をや。

〔多識編<sup>三</sup>〕蠶豆、曾良末米、異名胡豆、

〔和爾雅<sup>六</sup>米穀〕蠶豆ソラマメ、胡豆

〔朱氏談綺<sup>下</sup>米穀〕蠶豆ソラマメ

〔日本釋名<sup>下</sup>米穀〕蠶豆 其實空ソラに向ひてなる物也

〔物類稱呼<sup>三</sup>生植〕蠶豆ソラマメをらまめ 東國にてをらまめといふ、西國にてたうまめ、出雲にてなつまめ、尾張にてのらまめ、向名有、別種なり、是空豆の轉語にや、伊豆駿河にて、五月まめ相模にてふゆまめ、下總にてゆきわりまめ、伊勢及遠江にてがんまめ、中國にててんちくまめと云、空豆とは、其實の空に向て生る故になづくとかや、

〔庖厨備用倭名本草<sup>二</sup>〕蠶豆ソラマメ 倭名抄ニ蠶豆ナシ、多識篇ニソラマメ、元升井向曰、俗ニハナツマ

蠶豆